

デジタル地球儀 SPHERE 体験会 「地球ふしぎ発見in南丹美山」

会場： 美山里山舎 （京都府南丹市美山町島朴ノ木8番地）

時間： 14:00 - 15:30

主催： フリースクールいろは

- ーどうして砂漠やジャングルがあるの？
- ー北極と南極の違いはどうしてできるの？
- ーどうして日本には田んぼが多いの？

私たちが生きているこの世界をよくみると、ふだんは当たり前だと思っている「ふしぎ」があふれています。

古代ギリシャで大地が球体だと初めて認識されて以降、人類は長い時間をかけてこの地球の姿を把握しようとしてきました。そして現代、テクノロジーの圧倒的な進化により、地球という星について、いくつもの奇跡と何億年もの命の歴史による成り立ちとともに知ることができるようになりました。

デジタル地球儀「SPHERE」は、ふしぎと奇跡に満ちた地球のありのままを、豊富な最先端の科学的データを可視化しながら、体感的に学び、知ることができるメディアツールです。気候や気流、潮流、大陸移動などの地球科学のほか、地球温暖化や大気汚染、貧困やグローバリズムの現状やシミュレーションなどさまざまな社会問題も最新のデータとともに地球儀上でわかりやすく可視化されます。

ただ単なる学びや知識の範疇を超え、地球儀上で可視化されるこれらの地球の姿は、私たち大人はもちろん、子供たちの教育においても、教科の垣根を越えて、この世界についての様々な発見と深い理解を与えてくれます。そしてそれは、今の社会への洞察力を養い、これからの時代をどう形作っていくべきかを考える大きな力となるはずです。

この度、このデジタル地球儀「SPHERE」が美山町宮島地区で活動する「美山里山舎」にやってきました。豊かな自然と文化を持つ南丹市美山町において、地域での体験機会を創出することと並行して、SPHEREを生かした「地球目線」のダイナミックな視野を養う機会も同時に作ることで、地域に根ざして大きく未来を描いていくグローバル感覚を育てていけるのではないかという思いが導入の動機です。

12月22日、SPHEREの開発者であり、国連を始め世界各地で講演を行う文化人類学者の竹村眞一さんが美山にてSPHEREの魅力を伝えるデモンストレーションを行います。皆様にはぜひ、この機会にご参加いただき、SPHEREに触れ、美山町および南丹市におけるこの画期的なメディアツールの活用の可能性について幅広くご意見を賜れましたら幸いに存じます。

講師：竹村眞一さん

京都芸術大学教授、NPO法人 Earth Literacy Program代表

東京大学大学院・文化人類学博士課程修了。東北芸術工科大学助教授等を経て現職。地球時代の新たな「人間学」を提起しつつ、ITを駆使した地球環境問題への独自の取組みを進める。

1996年に企画プロデュースしたインターネット作品“Sensorium”（インターネットエキスポ 日本館コンテンツとして制作）は、電子アートの登龍門アルス・エレクトロニカで金賞受賞（1997年；ネット部門）。

「触れる地球」（2005年グッドデザイン賞・金賞、2013年キッズデザイン賞最優秀賞・内閣総理大臣賞）や「100万人のキャンドルナイト」、「Water展」「コメ展」（21_21 DESIGN SIGHT）などを企画・制作。

東日本大震災後、政府の「復興構想会議」専門委員に就任。また国連UNISDR（国連国際防災戦略事務局）からの委嘱で、2012年以降「国連防災白書」のコンセプトデザインを担当。「食の万博」ミラノ万博では日本館の展示を企画・監修。2017年より東京都環境審議会委員。

J-WAVEナビゲーターも務め、「グローバルセンサー」（2009～2011）に続き、2015年10月から2017年3月までホスト番組「アーストーク」を担当。

著書に「地球の目線」（PHP新書）、「宇宙樹」「22世紀のグランドデザイン」（慶応大学出版会）、「地球を聴く」（坂本龍一氏との対談；日経新聞社刊）、「新炭素革命」（PHP）など。

「宇宙樹」は高校の国語の教科書にも採録されている。

SPHERE

公式HP <http://sphere.blue/#top>



球体のスクリーンにプロジェクター投影する形式によるデジタル地球儀。

直径60cmで容易に分解できるため、固定せず楽に移動し各地で講演・デモンストレーションを行うことが可能。（施設展示・教育機関などでは80～128cmの大型版が多い。）

気象データや輸送船舶の位置データの可視化などのリアルタイムで反映されるコンテンツのほか、大陸移動、過去の津波や地震の様子などの地球科学のコンテンツ、大気汚染や水資源の変遷およびシミュレーションなどの環境問題に関するコンテンツなどが豊富に揃い、またネットワークを介しそれらのコンテンツは随時アップデートされる。

基本操作はタブレットを使うが本体付属のセンサーにより手をかざすことで地球儀の映像を回転させること

ができる。

様々なテーマに沿った自動プレゼンテーションモードも備えており、これまでも多数の展覧会で展示されている。現在は東京ミッドタウンの21_21DESIGN SIGHTにおける「ゴミうんち展」にて展示中。

導入施設等

北海道・東北： 函館未来館、旭川市科学館、東北大学

関東：東京大学、MCフォレスト、港区立みなと科学館、慶應義塾幼稚舎（小学校）、芝浦工業大学、お茶の水女子大付属中／高、港区立高松中、板橋区立中台中

中部・近畿：スズキ歴史館、コウノトリ文化館、兵庫環境体験館、名古屋大学

中国・四国・九州：あかがねミュージアム、かごしま環境未来館、愛媛大学

企業等

ソフトバンク、NTT宇宙環境エネルギー研究所、オービック、ウェザーニューズ、味の素、サントリー、学研、JAG、三菱商事、富士フィルムビジネスイノベーション、リファインホールディングス、三井住友銀行、三菱地所、LIFULL

その他多数（※旧版含む）